

作品タイトル…ファイター

筆者名…うたかた

あらすじ…鈴木新太はボクシングチャンピオンだ。今度、ドン・エンガスというアイルランドからの挑戦者との戦いを控えている。彼とは記者会見で殴り合い寸前になっていた。しかし、ある日ランニング最中で休憩したエンガスとぼったり出くわし、胸のうちを明かす。

本編の文字数…四七二三文字

【鈴木新太 VS ドン・エンガス 世界王座決定戦】

俺が記者会見の場に入ると、そう書かれた吊り下げ看板が目に入った。大ききもさることながら、青地に白文字でだいぶ目立つ。(へー格好いいじゃん)と思いながら、看板下の長テーブルにある椅子へ腰をおろした。

中央に俺とエンガスが座る。それぞれの隣にトレーナー、セコンドなどが並ぶ。司会者から始まりの挨拶があり、「それでは両選手に試合への想いを語っていただきます。まずは鈴木選手から」との振りがあつた。

「防衛戦ですから、勝ってベルトを守りたいですね」

「KOで、という意味でしょうか？」

「それはゴングが鳴って、始まるまで分かりません。エンガス選手は非常にタフな選手ですから」

チャンピオンは余裕のある発言をしなければならない。謙虚である方がファンの受けもいだろうし。

ただエンガスがタフ、というのは本当だ。アイルランド人である彼には決して折れない闘志があつた。過去の試合を繰りかえし観たが……一番の特徴かもしれない。顔面にストレートを何発受けても、目の炎は消えない。挑み続ける。四角い顎は、フックを物ともしなかつた。アイルランド人には、大和魂ならぬアイリッシュ魂というものがあつたと聞いたが、あれが正しくそれだろう。

そして、赤みがかった短髪を揺らして相手の懐へ。互いの射程圏内でぶしと
いう名の銃を撃ちあうのだ。エンガスは機関銃のようにパンチを繰り返す。相手
の発砲は避けずに負傷したまま。まさに、肉を切らせて骨を断つ。典型的なフ
イタータイプのボクサーだ。奴のパンチのどれかが決定打となり、相手は膝から
崩れ落ちる。重要なパーツを抜かれたジェンガのように、ガラガラと。

反面、フットワークはそれほど。だから俺の作戦はこうだ。遠くからボディ
ローを何度も打って、体力を削る。相手がファイタータイプならば、こちらはア
ウトボクサーでいく。ボディは後から効いてくるので長期戦にはなるだろう。そ
のため今回、**否**宣言はしなかったのだ。俺も防衛戦は五度目。だんだん戦い方
のバリエーションも増やしたし、ずる賢くもなった。相手の良さを消す手法も学
んだのだ。

とはいえ、俺もチャンピオンになるまでは、ハードパンチャーを売りに接近戦
で生き残ってきた。好みなのはファイタースタイルだ。距離を保って、カウンタ
ーなどの決定打を狙うのは得意ではない。だからエンガスに俺の想像を上回る
ような、気力と体力があれば——勝負は博打となる。ダイスを転がさねば目は分
からない。

続いて、司会者はエンガスに訊く。

「挑戦者としてはいかがでしょう？ どういったファイトを望まれますか」

エンガスは鼻を鳴らす。マイクを口元まで持ち上げた。

訛りの強い英語が飛びでてくる。『私』の意味であるアイが、オイと聞こえた。
荒々しく速い口調を受けつつ、通訳者が一時停止する。その後、エンガスの言葉
を翻訳した。

『アラタがどうこようが、ぶちのめすだけだ。ボコボコにする。恋人が奴の顔を
見ても、誰か分からなくなるくらい。リングに這いつくばらせて、マットの苦み
を味わせてやる』

挑発的な言葉で、通訳者の話が終わる。すると、エンガスが俺の顔を見つめ、
右手の親指を下に向けた。さすがに無学な俺でも分かる。ゴー・トゥー・ヘルッ
て意味だ。頭に血が昇るのを感じたが、ぐっと堪えた。

「……挑戦者の意気込みを感じますね」

司会者がお茶を濁し、俺とエンガスの戦歴とファイトスタイルの説明を始め

た。主催者が見どころを語り、ひと段落した後「それでは記者さんに写真を撮っていただきましょう」と参加者へ声をかけた。

俺とエンガスは椅子を立ち、テーブル前に集まった。ファイティングポーズを取り、顔を記者団の方へ。稲光のようにフラッシュを焚かれて眩しい。カシヤカシヤという鋭い音が会場に響く。

撮影終了のアナウンスとともに、エンガスが体をこちらに向けた。俺は握手でもするのと思った、嫌になるくらい力いっぱいなの。だが、奴はこちらを睨みつけ顔をじりじりと近づけてくる。距離にして十センチもない。荒々しい鼻息まで感じる。俺は次第に苛々としてきた。可愛いラウンドガールなら歓迎だけど、何だコイツは！ どちらかが手を動かせば即、殴り合いになるだろう。じつと睨み合う。

どこまで顔を近づけるのか、と思っていたらエンガスの額がぶつかった。軽くだが頭突き of 形になり、カッときた俺は右こぶしを固くにぎって振り上げようとした。すると、セコンドたちが慌てて間にはいった。俺たちを引き剥がす。

エンガスが俺のことを『チキン野郎』と連呼して、離れていく。その声は記者会見後も、しばらく俺の耳に残った。

二

記者会見が終わり、試合の二日前。

清々しい空気の朝、俺は都内の公園でランニングをしていた。試合直前なので食事は、うどんやお握りなど消化に良いものを食べている。時にはゼリーで済ませたり。減量で体力を消耗しているため、激しいトレーニングは避けていた。それも、足を捻ってしまつては元も子もないから、短距離のランニングにしている。公園を三周したところで休憩のため、歩幅を緩めて園内へはいる。すると、ベンチ脇に先客が立っていた。灰色のパーカーを着て、ズボンに黒のジャージ。冷蔵庫のような体型に、四角い顔つき。見覚えがある。男はこちらに視線を寄越し、かぶっていたフードを脱いだ。

「よお、チャンプじゃねえか」

先日、俺と乱闘騒ぎになりそうになったエンガスだった。

俺はすぐに息をととのえ、背筋を伸ばす。目つきを鋭くしたところ、エンガスが言葉を続けた。

「この前の会見は盛りあがったなあ。座りなよ、少し話そうぜ」

そう言って、ごつい顔をくしゃりと崩して笑い、ベンチを指さした。俺は奴の流暢な日本語と、笑顔に驚く。まるで別人じゃないか。戸惑っているとエンガスはベンチに座り、スポーツドリンクを飲みだした。

「ブラザーどうしたんだ。怖い顔をして。ああ、もしかしてあれか。ちよつとばかりヘッドバットになったことを怒ってんのか。あれは悪かったよ。顔をぎりぎりの距離で保つて難しいもんだな」

目を細めて、がははと豪快に笑う。

「わざとじゃなかったのか？」

俺は怪訝な顔をしながらも、エンガスの隣に腰をおろす。ふざけている訳でもなく、嘘をついているようにも思えなかった。どうやらコイツはこっちが素らしい。

「わざと？ 試合を上映してくれるテレビ局のお偉いさんだったか。アラタは冷静で怒らないから、つついて盛り上げてくれて言われたぞ。アラタにも言うておくからって」

きよとんとした顔で俺の質問に答える。

俺は会見前に挨拶にきた小太りのおっさんを思いだす。ズボンのボタンがはじけ飛びそうな腹をしていた。そいつに「掴み合いになっても構わないから、話題になる絵をくれよ」と背中を叩かれたんだった。誰かも分からないし、適当にあしらっておいたんだが。あれがテレビ局の偉い人だったのかもしれない。

俺は強張らせていた体から力を抜く。

「俺はそんな演出、聞いてなかったよ」

おお、とエンガスは右手で顔をおおう。

「じゃあ、怒っていたのは演技じゃなかったのか……」

「当たり前だろ。怒りで血管がちぎれそうになったわ。今でも、チキンって言われたのは根に持っているからな」

「恥ずかしい。チャンピオンに失礼なことをしてしまった」

顔を隠している仕草が、会見の時のギャップがありすぎた。今度は俺が声をだして笑う。ベンチ隣りの木に止まっていたのだろう、鳥が飛びたつた。木々がさわさわ音を立てる。落ち着いた俺はエンガスに疑問をぶつけた。

「それにしても日本語が上手いな。記者会見だと英語だったのに」

「母国語じゃないと迫力がだせないから」

「いや、立派な日本語だとおもう。どうやって覚えたんだ。日本に住んでいる訳でもないだろうに」

エンガスは顔から手を外し、俺の目を見る。昔飼っていた飼い犬とよく似た瞳だった。四角く逞しい顔つきが、なぜか可愛らしく思える。

「ありがとう。日本文化が好きだからだよ。動画配信でヤクザ映画、時代劇、戦隊シリーズ、アニメを何度も観て覚えたんだ。子供の頃からだ。特に素晴らしいのは妖怪だな」

「妖怪が？」

「そうだ。日本人はクリスマスやバレンタインデーとか他文化を取り入れて、自己流にしてきたんだろう。漢字だって中国が起源だし、メインの宗教も中国からだ。だからオリジナリテイがない、自分って何なのかと悩む。そう聞いたぞ」

どこで聞きかじった知識だろうか。エンガスの話を聞きながら、俺は自国について考えたことが余りなく、知らないことが多いと思う。少し恥ずかしくなる。

「だけど、アラタ。そうじゃないんだ。日本人は、空想力豊かに妖怪を作りだしてきたじゃないか。川辺でカエルが体をゆする音から、小豆を洗う妖怪を発想したり。西洋人の外見から鬼を生みだしたりな。ははっ。オリジナリテイ溢れる物づくりの国民なんだよ！ だからアラタはファイターでもアウトボクサーでも一流なんだ」

ただ、とエンガスは言葉を溜めて、親指で自分を指さす。

「俺たちアイルランド人も妖精の国だ。背中に羽根を生やした小人妖精や、人の死を叫ぶおつかないバンシー、首のない騎士の妖精なんかを考えた。似てるんだよ、日本人とアイルランド人は。どちらも技術を作り、高める種族だ」

エンガスは俺を前に微笑みを浮かべる。明後日、殴りあう相手だというのに。

「リスペクトする日本人、しかもアラタと戦えるなんて光栄さ。色々なスタイルを持つているから、勉強になるし。今までの防衛戦を観させてもらった。特に、

二戦目でやりあったアメリカ人へのストレートの乱打は痺れたなあ。いくら打たれようとも、倍の手数で打ち返して。阿修羅みたいなラッシュだった。クールだったよ。ああいうファイトに憧れて、ボクシングをやって来たんだ……でも、俺も嘸ませ犬じゃないからな。一試合ずつアイルランドで実績を積んできて、やつとあんたと戦える場所まで来たんだ。全てを出し切るつもりだ。今日は会えてよかったよ。誤解も解けたし」

そう言つて、俺の前にこぶしを突きだす。俺もこぶしをだして、軽くぶつけあった。ビール瓶をかちりと合わせて、互いの健闘を祈るかのように。

それから、俺もエンガスの試合を全てビデオで観ていること。決して折れずに、相手と打ちあう姿勢に感心していたことを伝えた。タフネスに脅威を感じているが、負けるつもりはないということも。

それでいいんだ、とでもいうようにエンガスは深く頷く。

俺たちは強い握手を交わして別れた。公園を出る時、俺は心の底を分かりあえる数少ない友人に出会えたと感じた。

三

広いホールを埋めた数万人の観客たちから、声が湧きあがる。彼等の熱気を宿した視線。高い天井から中央へ降り注ぐスポットライト。全ては俺たち二人が立つ、四角いリングに集約されている。

順に名前を呼ばれ、それぞれが両手をあげた。ファンも大声で俺たちの名前を叫ぶ。

コーナーで待っていると、ゴングの音が響き渡った。

前傾姿勢のエンガスが体を揺らしながら、真つすぐこちらへ向かってきた。目を爛々とさせて。さて、俺はどうする？ 事前に考えていた通り、距離を置いてエンガスを囲み、ボディブローを打ち続けるか？ 体力を削ってから、乱打戦に持ち込む？

いや。

コイツとは……素顔を見せあったボクサーとは真正面からぶつかろう。敬意を払つて。

お互いに全力を出し切ろうじゃないか。ド派手なファイタータイプ同士の殴

り合いだ。連続する打ち上げ花火を観客に見せてやろう！ それでベルトを奪
取されたとしても、俺に悔いは残らない。

——どんなファイトになるんだろう。

俺もエンガスに向かっていく。少し口角を上げながら。